

---

# 鎖空

高橋と喪服

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鎖空

### 【Nコード】

N0858M

### 【作者名】

高橋と喪服

### 【あらすじ】

これは、5人の少年少女の物語だ。

一人は世界の波に呑み込まれ、許される事を望んだ。

一人は可能性にかけ、鳥籠を脱した。

一人は愛する人の死によって、初めて自ら歩みを進める。

一人は家名に従い、『聖剣』を目指す。

一人は己の運命を悲観しながら、諦めきれぬ想いを燃やす。

これは、五人の少年少女の物語だ。

彼らが鎖で閉ざされた空を、羽ばたく事が出来るのか。

遠い世界、近い人々が織り成す異世界ファンタジー、始動。

## プロローグ 春葵天嘉の始まり（前書き）

注意。

この作品の特性上、主人公が多く、何度も視点が移動します。基本は部ごとの移動に留めますが、一部の間に何度も移動する事もありますので、ご了承ください。

## プロローグ 春葵天嘉の始まり

俺の世界が、決して褒められたものではない事は知っていた。俺の生き方が、決して胸を張れるようなものではない事を、俺は知っていた。

罵られる様な行為は勿論、眼を背けられる様な事もやった。生き死にに関心を失くしてしまう位に、命を軽く扱ってもいた。

しかし……その事を後悔していないかと言われれば、それはきつと嘘になる。こんな生活に身を堕としてから、幾度となく自分が犠牲にしてきた人々の幻影に追われてきた。振り払う事の出来ない、悪夢に。逃れる事の出来ない、責任に。

過去を省みる事はしなかったが、常に過去に取りつかれていた。過去が、ゆらゆらと俺の周りに漂っていたのだ。

言い訳は出来ない。だが……償う事は、出来るんじゃないか？

赦される事はなくとも、償い続ける事は、出来る筈だ。

その思案に行き当たった三日後。俺は世界で最も法が確立され、且つ世界最大の宗教『グリゲウス教』発祥の都、『聖都』へ向かう事を決意した。

罪を、償う為に。

## ブローグ クルト・ハルティヒの始まり

「それじゃ、あっちに着いたら手紙書くから」

「本当に、大丈夫なの？ 洗濯はちゃんと毎日するのよ？ 料理も、危なそうな食材はすぐに捨てるのよ？ 本当に、一人でちゃんと生活できる？」

もう何度目か。過保護な姉が、垂れた目を心配そうに細めて聞き飽きた言葉を言う。

「大丈夫だよ、姉ちゃん。家事の方は一通り出来るし、金に関しては貯金もある。稼ぐ術もある。心配する事は何もないよ」

俺もそれに言い飽きた言葉を返し、今度こそ家を後にしようと扉に手を掛けた。

「……クルト！」

姉が俺の名を呼ぶ。どこか諦めの籠った、悲痛な声で。

「これ、持って行きなさい」

黙って振り返った俺の手に、固く冷たい何かを握らせ、姉は俺の頭を撫でた。

「良い？ 辛かったらいつでも帰ってきて良いのよ。お姉ちゃんは、いつでもクルトの味方だからね」

目にたつぷりと涙を湛え、しかしそれを感じさせない気丈な笑みで、姉はほほ笑んだ。

「……手紙、絶対書くから」

それしか言えず、後ろ髪引かれながらも、俺は家を飛び出した。

手に握ったままの冷たいプレゼントは、温かみを帯びていた。

## プロローグ カラスの始まり

ばあばが、死んだ。一週間前の話だ。

その前の晩、ばあばは珍しく夜の散歩に出掛けなかった。今思えば、それが徴候だったのだろう。

「ねえ、カラス」

呼ばれて、振り向く。ばあばは、温和な目をこちらに向けて、眠たそうな声で続ける。

「おまえ、希望ってどんなものだと思う？」

「……よく、わかんない」

少し考えて、何も浮かばなかったので、素直にそう言つと、ばあばはそうかいとからから笑つて、更に続けた。

「あたしはね、カラス。希望ってのは、絶望って落とし穴の隣に有るものだと思うんだ」

「……どういうこと？」

「わからないかい？ そうかい」

わからないかい、ともう一度言つて、ばあばはまたからからと笑



った。

「ねえ、どういうこと？」

ばあばに近付いていき、その暖かみのある茶色い瞳を見つめる。いつもなら、こうすれば仕方ないねえ、と言いながら答えをくれていたから。

でも今度は何も言わなかった。

ばあばは黙ったまま、私と見つめあい、一際優しく笑ったかと思うと、急に私を抱き寄せた。

「わぶ……。ばあば、苦しいよ」

嬉しさを隠しながら、私はばあばにそう言った。離さないで欲しいなと思いながら。

「……う、く……」

「ばあば？」

ばあばの体が、震えていた。

どうしたのかと呼びかけるも返事はない。ただ強く、抱き締められるだけだった。

そのまま、私とばあばは寝てしまった。ただ私が起きてても、ばあばが起きる事は、なかった。

## ブローグ クロリス・リヴァーモアの始まり

聖剣祭があと一カ月に迫った、ある夜の話だ。

僕は渦巻く不安を打ち消す為に修練所で一人、模造剣を振っていた。

僕しか居ないだっ広い空間に、風切り音が響く。何度も、何度も。

それでもなお消えない不安に、僕は剣速を速めていく。更に早く。更に早く。

そんなことを、もうどれ位続けただろう。

修練所の光を呑みこむ入口の闇の中に、ぼんやりと誰かの姿を視認した。

「……姉さん。どうしたんです？ こんな夜更けに」

闇に浮かびあがる、寝巻のままでも豪奢なその姿に、僕は模造剣を振るのを止めてそう声をかけた。

「それは、私があなたに対する質問の筈なのだけけど。どうしたの？ こんな夜更けに」

輝く金色の髪を揺らしながら、姉はゆっくりとこちらに向かってくる。

僕は無言のまま、近付いてくる姉に背を向けて模造剣を振りなおした。

後ろから、小さなため息が聞こえる。それでも、僕は剣速を緩めない。

「クロリス」

名を呼ばれて、後ろを振り向く。

そこには、僕が持ってきていたもう一本の模造剣を振り上げた姉がいた。

「  
姉さん!？」

振り下ろされた一撃をどうにか受け止める。力任せの、重い一撃だった。

「付き合って上げる。どうせ、眠れそうにないし」

姉は、何処か陰のある笑みを浮かべて、もう一度剣を振り下ろした。

## ブローグ アレクシア・リヴァーモアの始まり

弟 クロリスと修練所で出会う2時間前、私は父様に呼ばれ、その私室に向かっていた。

多くの調度品で飾られた廊下を通り、私室の扉の前へたどり着く。

「父様。只今参りました」

ノックをして、そう告げる。

「入りなさい」

重々しい、威厳に満ちた声が扉の向こうから返ってきた。

「はい。失礼します」

ゆっくりと扉を開け、一步前に踏み出し、頭を下げる。

「座りなさい」

促され、父の正面にある臙脂色の椅子に腰を掛ける。

「さて……来てもらった理由だが、お前ももう知っているだろう。一ヶ月後の、聖剣祭の事だ」

『聖剣祭』。世界に現存する七本の聖剣の一本、『黄昏』の適格者を見つける為に開かれる、聖都最大の祭り。

そこで聖剣を引き抜く事こそ、我が家の悲願である。

「はい。存じております」

忘れるわけがない。その祭りの為に我が家の人間が何度辛酸を舐めた事か。

「その祭りの後、お前の婚約発表がある」

「……………は？」

一体、誰、と？　そもそも、この聖都にリヴァーモア家と肩を並べる名家など…………。

「王都のアラゴン家とだ。我がリヴァーモア家と並べても遜色ない、名家だ」

この人は『誰』と結婚しろと言わなかった。

…………『家』と結婚しろ、と？

「話は終わった。もう良いぞ。早く寝て、体を大事にしろ」

優しく、父は私の身を案じる様な事を言う。

だがそれは、『道具』に何かあってはいけないという想いから零れたに過ぎないのだろう。

「…………はい。失礼、します」

真っ白になった頭のまま、私は父の私室を後にした。

窓から見える月が、夜の長さを告げていた。

## 第一章 二人の邂逅

切り裂くような音が、睡眠の淵にいた俺の意識を呼び覚ます。それと同時に、大きな振動が身を遅い、僅かに残っていた眠気を完全に吹き飛ばした。

周りを見れば、荷物を持って立ち上がり腰を伸ばす人や、さっさと列車から降りていく人が目についた。

どうやら、どこかの都市に着いたらしい。俺は壁に立てかけた刀に小さく呼びかけた。

「ここはどの都市だ？」

言って、俺は刀身と柄の間で輝く宝玉に眼を向ける。

「響都だ。聖都はまだまだぞ」

空色の宝玉がゆらゆらと輝き、そう告げた。

「そうか。ありがとな」

物言う刀　カグラに礼を言い、俺はもう一眠りしようと眼を閉じようとして……

「悪いんだけど、ここ、良いかな？」

そんな声に、再び目を開ける事になった。

「いやー今日は暑いね。ここまで走ってきたから、汗掻いちゃったよ」

動き出した列車の中、向かい合った席の真正面に座った男は、人懐っこそうな笑みを浮かべてそう言った。

年齢は……俺と同じ、19歳位だろうか。茶色の細い髪に、大きな猫目、薄い唇が特徴の、整った容姿をした男だった。

「これから、どこへ？ 前の駅で降りなかったって事は、行先は王都か、聖都だよな」

手で顔を仰ぎながら、男はそう訊いてきた。大きな猫目は、しっかりと俺の眼を捉えている。

「……ああ、そうか。まずは自己紹介だよな。俺はクルト・ハルティヒ。聖都に行くんだ。短い間かもしれないけど、よろしく」

俺が黙っていると、クルトと名乗った男は白い歯を薄い唇から零れさせ、右手を差し出してきた。

「……………響都の人間は、皆そんなに馴れ馴れしいのか？」

腕を組み、大きな猫目を見つめ返す。

クルトは行き場のなくなった手を空中で振ると、苦笑を浮かべる。

「いや、そうでもないよ。響都は四つある都市の中で、唯一の研究



都市だからね。他人に興味のない人間が大半で、俺みたいなのは珍しい位だよ」

「そうか。なら、都市柄を守って黙っていてくれないか？　俺は、静かに寝ていたいんだよ」

クルトに向かってはつきりと告げ、俺は腰をイスに深く腰掛けて再び目を閉じた。

「……ねえ」

無視だ。俺は早く寝たいんだよ。

「……ねえって」

今度は声を掛けるだけでなく、肩を揺さぶられる。いい加減鬱陶しくなってきた。

「ねえってば」

「何だ………！？」

頬を叩かれ、俺は怒りを籠めた声を唸りながら目を開けた。

「彼女、入れて欲しいってさ」

飄々とした態度で俺の怒りを受け流すと、クルトは通路側を指差した。

怒りで気付かなかったが、どうやら小柄な誰かが立っているらしい。

「……良い？」

無表情な少女は、俺の隣を指差して、そう言った。

## 1 - 2 三人目と刀と喧嘩と

何なんだ。この無愛想な男は。

心の中でそう悪態を吐いて、俺は眼を閉じて寝ようとする目の前の無愛想な男に眼を向けた。

高い鼻に、意思の強そうな眉、豊かで癖のある黒髪が特徴の、男前と呼んでも差し支えない容姿。ただ、眼を閉じていても残る目付きの悪さで台無しになっていたが。

全身黒一色の服は、趣味なのか。だとしたら、決して良い趣味とは言えないが。

それに、この男には明らかに荷物が少ない。旅行バッグを持っているわけでもなく、持ち物と思われるものは、壁に立てかけられた禍々しい形状をした刀だけだ。

……俺、何でこんな奴の描写やってんだろ。馬鹿馬鹿しい。

さて、これからでも移れる場所を探そうかな、と周囲に目を向けると、一人の少女と目が合った。

艶やかな黒髪に、真っ赤な唇。白い肌にはシミ一つ見当たらず、柳眉の下の瞳は、大きな輝きを放っていた。

まさに美少女。……ああ、まさに、美少女だ。

しかしどうする。声を掛けるか？ しかし、俺の前に居るのは黙っただけでも陰険さ溢れているような男だぞ？ コイツが居ると、怖がられてしまうのではないか？

そんな俺の逡巡を軽く乗り越えるように、美少女はどんどん俺に近寄ってくる。

そして……俺の（正確には俺たちの）、席の前で、立ち止った。

……もう、これは運命だ。確実に、これは運命なんだ。

考えてもみる、心の中で美人局の可能性を思案する心配性の俺。  
良いか、美人局つてのはな、もっと男好きのする顔をした、いわば尻軽がする事だろうが。この娘にそんな雰囲気有るか。ねえよ。  
こんな清纯派始めて見るもん。つてか、こんな美少女の心がそんなに汚れている訳がない。汚れているなら……そんな世界肅清してやる。ああ、こんな事をしている場合じゃない。彼女が座りたがっているじゃないか。早くどうかしてやらないと。とはいっても、俺の隣は荷台と足元に置ききれなかった荷物で占領されているし、空いている場所と言えば……コイツの隣しかないか。

さて、それじゃ、無駄に足の長いこの無愛想野郎を起こして、さっさと席に座らせてあげましょうかね。

「いやー今日は暑いよね。まだそんな季節じゃないっていつのにさ」

会話に掴みに、と気温の事を話題にする。

その時に、無愛想男にさも「ワンパターン」だなどとも言つように鼻で笑われたが、無視だ。無視。俺の情熱は、その程度では揺るがないのだ。

「俺、クルト・ハルティヒ。よろしく、えーっと……」

「……カラス」

「そう、カラスちゃんか！ 可愛い名前だ」

今まで無愛想男を相手にしてきたからか、この程度の応答でも嬉しく感じてしまう。

「……カラスって、あの鳥のか？」

おい！ 無愛想男！ 何でここで口を出すんだよ。お前はさつさと寝てろよって……あれ？ 寝てる。今の誰？ 俺の聞き違い？

「……知ってるの？」

カラスちゃんも聞いたって事は、聞き違いじゃないよな。じゃあ、一体……。

「うむ。私が昔居た国では、何百羽、何千羽と居た。しかしもう、絶滅してしまったらしいがな」

……えっと、今、壁側の刀から声が聞こえたんですが。まさか、ね。

「知ってる。世界中に居たらしいね」

……カラスさん？ そこに有るのは、刀ですよ？ そんな所から、まさか声が……。

「そうだな。これも人の業というヤツか。悲しいものだ」

「……ってやつぱりお前かい！！」

「全く、若いのだからもつと適応力を持て。この世界じゃ、たかが剣がしゃべる事くらい当たり前に起こり得るぞ」

穏やかながらも厳しい老人のような声で、カグラと名乗った刀はそんな事を言った。

「いやいやいや！ 聞いた事ねえから！ ってか、カラスちゃんは何でそんなに受け入れられてるの？ え？ もしかして見たことあるの？」

訊くと、カラスちゃんはかわいらしく首を横に振り、口を開いて。

「でも、喋るほうが、格好良いよ？」

無邪気にそう言い放ったのであった。

「そら見る小僧。この娘は簡単に受け入れているではないか。全く、男だというのにこれでは……」

「何で俺がダメみたいな感じになってんだよ。持ち主が持ち主なら武器も武器か！？」

「俺が何だって？」

「起きてたのかよ!? ええい睨むな怖いんだよこの野郎!」

鋭い眼差しから目を背けて、俺はもう一度刀に目をやった。

別段、変わったところは見受けられない。高価そうな空色の宝玉が付いている以外は、切れ味が良さそうだけで普通の刀だ。

「何だ? 小僧?」

「小僧じゃない。クルトだ。クルト・ハルティヒ。自己紹介聞いてただろ」

今日でもう何度目になるか。俺は三度名乗った。

「うむ。そういえばそうだったな。自己紹介、か。……おい、テンカ!」

「……何だ?」

刀が聞き慣れない単語を叫ぶと、無愛想な男が声を返した。

「この小僧が名乗っているのに、お前だけ名乗らないのは失礼である。名乗りなさい」

うん、お前のも十分失礼なんだけどね。

「…………ハルキ・テンカ」

「あ?」

「ハルキ・テンカ。俺の名前だ」

「ずいぶん素直じゃないか。さつきとは大違いだな」

「ふん。お前こそ、愛想の良い仮面が剥がれちまつてるぞ」

相性が悪いのか互いに嫌味が飛び交いあう。

「……………みにくい」

「そうだな。こんな争いは、したくないものだな」

隣でカラスちゃんと刀が何か言っているが、もう関係ない。俺は拳を握りしめる。

「やるか？ 上等だ。泣いて後悔するんじゃないぞ」

俺の拳を見て、テンカは不敵に笑う。

「そりゃこっちのセリフだ」

無駄に背の高いテンカの顔を睨む。

「いくぞ　！」

「さっさと来やがれ　！」

互いに拳を振り上げ、俺たちは周りの目も気にせず殴り合いを開始した。



### 1 - 3 宿敵の過去

「へえ、じゃあここに居る皆、聖都に行くってことか」

車掌さんの一喝に猛省（意外な事にテンカもうなだれていた）している俺を、カラスちゃんが慰めて（残念ながらエロい意味じゃなく）くれてから少しして、カグラも加えて世間話している中で他の二人（正確には二人と一本）の目的地を聞いた俺は、驚きと嬉しさからそう言った。

「という事は、小僧、お前もか？」

うなだれたまま寝てしまったアホ（テンカ）に代わってその目的地などを答えていたカグラが、アホ譲りの失礼さを滲ませる。

「小僧じゃねえクルトだ。いい加減覚えろ」

まさか自分の名を名乗るのが常套句になるとは、この列車に乗る前には考えもなかったが、仕方ない。全部アホどもが悪いんだ。

「それは捨て置け。些細な事だ」

「捨て置けねえよ。名前だぞ。生まれて最初に貰う親からのプレゼントだぞ」

「ふむ、それは正論だな。では、クルト。お前も聖都に行くのか？」

どうやら、持ち主よりは常識（存在が常識を超えている事に目を瞑れば）を弁えているようだ。ちよつと感動。

「ああ、聖都の学園に編入する予定なんだ」

「……学園？」

「うん。もしかして、カラスちゃんも？」

そう訊くと、カラスちゃんは可愛らしくコクンと頷く。……本当に可愛い。

「『聖グリゲウス学園』って、知ってる？ その試験を受ける事になってるの」

グリゲウス。かつて『果てより出でる者』を地平の彼方に追いやり、現在世界の中心に在る技術『響奏術』を編み出した伝説の大聖人。

その名を冠する学園は、確か……。

「名門中の名門校じゃないか」

世界で最も教育機関が発達している聖都の中でも、特に、学力、家系共に優れた人間が通う、まさに世界一の名門校。それが、聖グリゲウス校だ。

「そうなの？」

「そうなのって……知らなかったの？」

カラスちゃんはまたしても可愛らしく頷く。……付き合ってくれねえかなあ。

「……クルトは」

「ん？」

「クルトは、一緒に行ってくれないの？」

決めた。俺この娘と結婚する。可愛すぎる。その上目遣いは世界を狙えるよ。いや、マジで。少なくとも俺は死ねる。君の為なら、死ねる。

「……クルト？」

ああ、何故だ。何故だ姉貴！ 姉貴さえ他の学校に行ってくれたら、今頃俺は……いや、無理か。姉貴は天才だから、アソコに行けたんだしな。

「多分、無理かな。ごめんね」

悔しさとやるせなさを感じながら、俺は頭を下げた。

「ううん。クルトは悪くないよ。これはただの私の我がまま。悪いのは私だよ」

聖都は確か、宗教が盛んだったな。よし生活が安定したらカラス教を立ちあげよう。この可愛らしさは、正に神のソレだ。誰も文句なんて言わないだろう。

「ねえ、カグラ。テンカは、聖都に何を学びに行くの？」

胸に熱い決意を燃やしていると、カラスちゃんが天使の美声を奏でた。

「そうだな。カグラ、今まで俺たちの事ばかりだったが、お前達は聖都に何をしに行くんだ？」

といっても、テンカの事なんぞカラスちゃんに比べたら心底どうでも良いのだが、カラスちゃんの手前、仕方なく訊いてやる。全く、本当にどうでも良いのだが。

「さて、な。テンカの目的など、私は知らんよ」

「でも、一緒に来たんだろ？　ちよつとは察しが付くんじゃないか？」

カラスちゃんがとても興味深そうな表情をしていたので、本当に仕方なく、そう訊く。本当、興味なんてものは微塵もありはしないのだが。

「アイツのやる事は、いつも突然だからな。私にもよく解らない。

……ただ」

「ただ？」

……この応答は条件反射であって、決して、決して、アホに興味があつた訳では断じてない。断じてだ。

ええ、このアホ。寝てるふりして起きてるんじゃないだろうな。この会話聞いて「あれコイツ、俺に興味あるんじゃない」みたいな思春期の男子みたいな勘違いしてんじゃねえだろうな。だったら、許さ

んぞ！

「ただ、悲しそうな顔を、していた。帝都を出る前まで、な」

「帝都？ コイツ、帝都の出だったのか？」

「何だ、知らなかったのか」

知らなかったのかって。帝都は、十年前に……。

「崩壊、した筈だろ。帝都は、『七月の月事件』で」

十年前まで、帝都は貴族第一の、階級社会だった。頂点に立つ貴族が全てを制し、全てを支配する。

そんな体制に、不満を抱く人間が居ない訳がない。それまで何度も起こったクーデター。それを何度も防いでいた軍隊は、もう限界だったのだろう。

十年前の七月、幾度にも渡ったクーデターが遂に成功し、革命は完成した。

……筈だった。

幾度にも渡る革命派と軍の衝突は、貴族だけでなくその下の平民。如いては社会全体にまで及び、クーデターの成功と同時に、秩序は完全に崩壊した。

それでも、最初の頃は革命派がどうにか納めていたらしい。しかし、力というものはより大きな力に吞まれるのは当然な訳で。

暴走した民は、革命派を呑みこみ、完全に帝都は崩壊した。

現在では、犯罪が横行する無法地帯になっているらしい。

「そんな……俺は『アルマ自治区』の出だと」

帝都崩壊の後、そこから脱した人々の手で造られた街。そのリーダーを冠するそこは、帝都の代わりに列車が止まる重要な自治区。テンカはその出だと思っていた。

確かに、言葉に帝都訛りはあった。だがそれは、親が帝都の人間だからだと思っていた。

しかし、違っていた。テンカは……。

「俺、コイツに悪い事言っただな。常識ないとか……十年前ってことは、コイツもまだ小さかっただろうに、教育とか、そういうの受ける余裕もなかっただろうに」

「気にするな、クルト。コイツももう割り切っている。過去なんてそんなものだ」

慰めてくれているのだろう。

先ほどからは考えられない、穏やかな声でカグラは言った。

「お前が気に病む事でもないさ。……ホラ、お前も寝ろ。聖都に着いたら起こしてやる」

「でも……」

「さっさと目を瞑れ。寝れば、ある程度落ちつけるさ」

優しい、しかし有無を言わさぬ口調に圧され、俺は眼を瞑った。

……眠れる訳が、ないのだが。

## 1 - 4 はじめてのともだち

「ここが……聖都」

列車を降りたその時から漂う、故郷 帝都とは違う、穏やかで綺麗な空気。

その煌めきに、俺はいつの間にか魅せられてしまっていた。

まず、人が多い。まるで人の海に潜ったかのような光景は今まで見た事がないものだ。

しかし、それでもここは空気が澄んでいた。

レンガ造りの石絨毯。周りは人の海、であるにも関わらず、だ。

帝都では常に周りを見渡せていたにも関わらず、ここまで綺麗な空気が見た事がなかった。

「凄い……」

隣のカラスもまた、黒曜石のような瞳をキラキラと輝かせ、辺りを見回していた。

俺と同様、こういった場所は初めてなのだろう。心の躍動などが、顔いっぱいに見えている。

そして、これは何より意外なことだったのだが。

「……………はあ」

あのお気楽お天気糞野郎が、何とまあ愉快的事に、沈んでいた。それはもう見事に、カラスとは全く逆の暗い雰囲気を感じている。



「何だ、鬱陶しい。新天地に来たんだ。目的地に着いたんだ。もっと喜べよ」

「うるせ……はあ。いや、何でもない」

一瞬、噛み付こうとしたようだが、何故だが直ぐにその牙を引っ込めてしまう。

この男にしては、珍しく殊勝な態度だ。

「なあカグラ、コイツに何があつたんだ？」

これ見よがしにクルトを指して、俺は腰に帯びたカグラにそう訊いた。

「さて、な。私は知らないが」

「……そうか」

カグラの返答に少し落胆を覚えながら、俺は腰を曲げてうつむくクルトを見降ろした。

「どうした、クルト。列車酔いでもしたか？」

「いや、そういう訳ではないさ。心配してくれて、ありがとな」

「……大丈夫か？ お前本当におかしいぞ。俺に礼を言うなんて」

ちょっとした衝撃を受けながら、俺はクルトの肩を掴んで顔を上げさせた。

確かに、少し青白い。もともと色白だから、更に目立つ。

「時間が開いたら病院行つとけよ。じゃ、俺はそろそろ行くから」

後ろ手を振ってカラス、クルト両名に別れを告げると、目的の方  
向へ歩き出す。

「待て、テンカ」

一歩踏み出そうとした時、クルトに小さいながらも強い口調で呼  
び止められ、俺は顔は向けずとも足を止める。

「……何だ？」

「何処に行く？」

「何でそんなこと言わなきゃならない？」

無言。

しばし周りの喧噪のみが耳に入り、その後、

「悪いか？」

そう、まるで開き直ったかのような透き通った声色で、クルトは  
声を発した。

「友達の目的地を知りたがって、悪いか？」

「……………友達？」

耳慣れない、というより、一生聞くとは思わなかった言葉。  
それをコイツの口から聞くという天災的事態に、俺は耳を疑いな

がら後ろを振り向いた。

「そつ、友達。悪いか？」

どうやら、聞き間違いではなかったようだ。

少し顔を赤くして語るクルトは、嘘を言っているように見えない。

「俺なんかが、友達？」

「友達。あと、自分の事『何か』なんて言つなよ」

「……俺に友達は要らない」

俺は伸ばしかけた手を切り落とし、もう一度、クルトから背を向ける。

コイツが与えようとしている薬は、恐らく、俺にとっては毒にしかないだろうから。

「せめて、目的地だけでも教えてくれ」

無駄に天真爛漫なコイツにしては珍しい、静かな声。

それに心を囚われて、俺はもう一度立ち止まる。

「……中央グリゲウス教会。一週間は、そこに留まるつもりだ」

流石に宿屋までは教えないが、これで十分だろう。

「じゃあ……三日後、三日後の午後一時、迎えに行く」

「何の迎えだ？」

「お前、これからしばらくは聖都に居るつもりだろう」

「他に行くところもないしな」

「それなら、住民票が必要な筈だ。三人で、それを取りに行こう」

「……三人って、私も、良いの？」

戸惑った様なカラスの声が聞こえる。

どうも、自分が数に入れられるとは思っていなかったらしい。

「当たり前だろ。一緒に行こう」

「……うん」

喜色の籠ったカラスの声が響く。

聞いている方まで嬉しくなるような、幸せそうな声色だった。

「三日後、な。気が向いたら行くさ」

「ああ、出来れば来てくれ。言いたい事もある」

言いたい事、それが何か気になりはしたが、それよりもこの温かい雰囲気能耐えられず、俺はその場を脱した。

## 1 - 5 僕の学園生活

『果てより出でる者』。

神話の時代、世界の深淵より現れ、人、大地、自然といった、この世界に住むあらゆる生命を凌辱し尽くした伝説の存在。

その正体は高度知的生命体とも、人の悪意の塊とも、神の遣いとも言われる、全てが謎に包まれた存在。

しかし、同時期にこの世界に誕生した大聖人グリゲウスの手によって地平の彼方へと封印され、その進撃は幕を閉じる。

その後、数を減らした人類はそれぞれ別の指導者の下、この『王冠型の大陸』に、四つの都市を作る。

一つは、『王都』。

大聖人グリゲウスの弟を初代の王に持つ、王制を敷く都市だ。

代々専制的な政治を行うも、国勢は整っており、特に、現王の『賢王アダルバード』の良政によって、かつてない程の繁栄を謳歌している。

二つ目は、『響都』。

『響奏学』を研究する科学都市。

情報統制が敷かれ、内情は滅多に外に漏れる事がなく、その実態は不明。

黒い噂の絶えない都市でもある。

三つ目は、『帝都』。

かつては世界一の軍事力を誇り、世界の覇権を握ろうとする野心的な都市であったが、十年前のクーデターにより、崩壊。

現在、その地位は新しく出来た『アルマ自治区』に受け継がれて

いる。

四つ目は、『聖都』

大聖人グリゲウスの故郷に都市を構え、グリゲウスを信仰する『グリゲウス教』が盛んである。

また、教育にも力を入れ、その豊富な教育機関から、多くの都市から人が集まる場所でもある。

その性質上、人口も都市の中で最も多い。

「なあ、クロリス」

世界史の授業中、隣のケントが気だるげな声で話しかけてきた。

「こんな授業に、何の意味があるんだろうなあ」

ケントとはもう五年の付き合いになるが、この言葉を聞くのは、もう何回目になるだろう。試験が近づく度に言ってる気がする。

「意味を知ってたら、君は勉強するのかい？」

「んー。それはまあ、しないんだけどさあ」

言っと、ケントは机に突っ伏して、スヤスヤと寝息を立て始めた。僕は寝つきが悪いので、この直ぐに寝る事の出来る点だけは、羨ましく思う。

……羨ましいと思えるのはそこだけなのだが。

「ごめんね。クロリスくん。皆に迷惑掛かるから今は無理だけど。後でキツくブン殴っておくから」

僕の左隣、つまりこの三人用の机でケントと対極の位置に居る人物、アンネが苛立ちを隠そうともしない顔でケントの後頭部を睨む。二人は所謂、幼馴染という間柄（しかも家は隣同士、今まで通った学校も同じ、幼い頃はお風呂にも一緒に入る筋金入りの）なのだが、僕にはどうもすっかり者の姉とだらしのない弟に見えて仕方がない。

「…………お手柔らかに」

今は試験前という事もあり、皆に遠慮している様だが、一度こうと決めたアンネは絶対に動かない。特に、ケントに関しては。

だから僕は曖昧に微笑んで、ノートを取る作業に戻る事にした。

「よし！ やつと終わった！ クロリス、どつか寄って帰ろうぜ」

何故ケイトはここまで切り替えが早いのだろう。

ここまで来ると、一種の才能と言えるのでは？

「まあ、それも良いけど…… ケイトには、他に用事があるんじゃないかな？」

鬼を凌駕して逆に神々しい表情をし、ケントの後ろで微笑んでいるアンネの方を見やる。

「用事？ 用事って何だ？ ってか、さっきからお前は何を見て

」

僕の視線を追い、ケントはアンネの方を見る。

一秒、二秒、三秒。

それから、何処か清々しい顔を僕に向けて、

「明日は学園に来れないから、先生に言っておいてくれないか？」

そう言った。

「分かった。お大事にね」



笑顔で見送る。

それ位しか出来ないし、してやる気もないから。

「ケント、行こうか？」

アンネがケントの手を握る。

それだけなら恋人同士のような温かな印象を受けるが、恋人というには二人の表情はかけ離れ過ぎていた。

一人は愉悦、一人は諦観。  
まるで狼と子羊だ。

「……………うん」

軽く微笑んで、ケントは連れ去られていった。  
最後まで、清々しい表情のままだった。

「……………本当、お大事に」

二日後……………いや、三日後学園に来た時のケントを想い、僕はそう  
言わずにはいられなかった。

「せーんーぱーいー！」

「うわっ！」

帰ろうと廊下を歩いていると、突然後ろから抱きつかる。

背中に伸しかかるちいさな感触に、僕は心当たりのある後輩の名前をつぶやいた。

「どうしたの？ ニーナ」

「あー、先輩、女の子が抱きついてるっていうのに反応ないなんて失礼ですよー？」

振り向くと、小鹿のように常に潤んだ瞳と、と軽くパーマのかかった金髪を肩口でそろえた髪型が特徴の可愛い少女 ニーナが、腰に手を当てて僕を睨んでいた。

「反応って、どんな反応すれば良かったの？」

「いつもはただの後輩と思っていた少女。しかし確かに育った彼女の体に、ドキマギ。急に意識しだした先輩は、恥ずかしさを隠すように怒れば、それで正解ですよー」

「……難しいよ、それ」

それに、『確かに育って』ないしね、彼女の体は。

「あー、何か失礼な事考えてませんでした……って、それはまあ良いや。先輩、どっか遊びに行きましようよ！今日は年に三回しか来ない列車が来て、安売りとか初めてる頃ですし、行くなら今日しかないですよ！」

そう言えば、もうそんな時期か。

この頃は聖剣祭に集中し過ぎていて、そんな事忘れてた。

「そうだなあ……どうしようか」

幸い、今日は剣術の師範が風邪のせいで道場が開られない。  
時間はたっぷり有る。

「どうです？ たまにはこのナイスバディ・ニーナと、甘いアバン  
チュールでも！」

「……そうだね、行こうか」

「さっすが先輩！ そうと決まれゴーゴーです。早く行きましよう  
！」

強く手を引かれ、共に屋内を抜ける。

キラキラとしたニーナの表情を見ながら、僕は明日も良い日になると良いなあ、と。

そんな事を思った。

## 1 - 6 太陽と夜

その男は、どこまでいつても真っ黒だった。

豊かな癖毛も、広い背中を包む外套も、長い足を覆う衣服も、その存在を構成する何もかもが、黒で統一されていた。

そして……何より、私のその印象を決定的なものにしたのは、振り向いた際に見せたその瞳だった。

月のない夜を思わせる、暗く深い暗色。

この世の全てを呑み込んでしまうような、闇の色。

そんな瞳を悪い目付で歪ませながら、男は、ゆっくりと私と正対した。

「……この者か？」

一瞬戸惑った様な表情を隠すように顔の陰を強め、男は口を開く。その声は、憤怒の様な、悲哀の様な、とにかく感情を判別しづら

い声色だった。

「いいえ、違うわ」

鋭い眼差しを投げかける昏い瞳を直視して、私は男の問いに返答した。

「そうか……」

特段残念な表情もせず、男はそう言った。  
昏い瞳は、私を捉えて離さない。

「……他に、何か？　あまり見つめられると、良い気分はしないのですが」

見られるのには慣れているが、こつも長い時間見つめられるのは初めてだった。

こついうものは、目が合ったら逸らすか微笑むのが礼儀の筈だが、この男は違う。

頬笑みも、逸らしもせず、ずっと、私の瞳を見つめ続ける。

まるで珍品を見るかの様なその眼差しが癪に障り、私はつい自分の辛辣な部分を曝け出してしまふ。

「そうか。それは悪かった。気に障ったのなら謝る。済まなかった」

男は静かに、頭を下げた。  
意外なまでに素直な男の態度に、私はつい拍子抜けしてしまふ。

あんなに睨みつける様な眼差しを送ってきた相手が、こんなに素直に謝るとは、思えなかったからだ。

「もう一つ聞きたい事が有るんだが、良いか？」

男に対する疑念を深めていく中、私は男の次の言葉を聞いて、疑念を深めるどころか放心してしまう事になる。

その言葉は

左右対称、華美になり過ぎない程度にあしらわれた装飾、権力を示すのではなく、全てを受け入れる為の巨大さを持った白く美しい建築物の前にたどり着いた俺は、静かに呟いた。

「ここが……教会」

「うむ。そのようだ。ここだけ、空気が違う。この都市はどこもそうだったが……空気が美しい。美し過ぎるといっても良い程に、な」

思わず口から漏れた言葉に、カグラがそう応える。

「俺も同意見だ。……なあ、カグラ、俺はここに入っても良いのだからか？」

あまりに神々しい雰囲気、俺はつい物怖じしてしまう。  
この全てが、俺を拒んでいる……そんな風に思えて仕方がないのだ。

「テンカ、神とは全てを救うものだ。特に、ここで信仰されている神は、悪人すらも救う、真摯に願い、求め、贖罪の意を示せばな」

「そういうものなんだろうか……。俺なんかを救う神が居て、良いのか？」

「……テンカ、クルトも言っていたが、自分をそのように言うのは止める。お前はお前が思っている以上に、価値のある人間だ」

「本当に……？」

そのような事を言われても、信じられる訳がない。

俺はカグラにそのような事を言われるほど、胸を張れる事はしていないのだ。

「本当さ。私は嘘は吐かない。今までも、これから。さあ、進め、テンカ。お前は、この一步を踏み出す価値のある男だ」

「……………ああ」

応え、俺は教会への歩みを進めた。

教会の中は、外から見るとよりずっと広がった。人もまばらで、更にその印象を強める。

そして、何より特筆すべき点は、外観の何十倍も美しい内装だ。その美麗さは、見る者を掴んで離さないだろう。

その中で、特に目を引くものがあった。

中央に設置された祭礼台の奥。位置からして、この教会で最も重要なものであろう、聖人像だ。

構図は、聖人が天に手を伸ばし、何か届かないものに手を伸ばそうとしているかのような。そんな、様々な受け取り方が出来るものだった。

俺には……彼が、太陽を求めているのではないだろうかと思えた。

太陽に近付き過ぎた英雄は、翼を焼かれて地に堕とされる……。しかし、彼は聖人であるが故に、太陽に近づく事すらも出来はしない。



だから、求めるのだ。

必死に手を伸ばして、誰かの為に、自分の為に。必死に、必死に。

そうして、聖人像を眺めて、どれ位経ったのだろう。

俺が背を向ける、出入り口の扉が、音を立てて開いた。

しかし、何時まで経っても中に入ってこようとしない。

俺は何があつたのか確かめる為に後ろを振り向いて……太陽を、見つけた。

外に立つたままなので、陽光を思い切り浴びて輝く、黄金の絹のような髪に、青空を思わせる瞳。白い肌はカップに注がれたミルクのようで、通った鼻筋は剣の様。人よりも背の高い方だという自負のある俺の肩にまで届くであろう長身に、長い手足。

真実、太陽の様な女が、そこに、何処か啞然とした表情で立っていた。

「……この者か？」

何時の間にか、そんな言葉が口を出た。

彼女が浮世離れた美しさを持っていたからであろうか。

「いいえ、違うわ」

「そうか……」

別段、気になっていた訳でもなかったので、俺は適当にそう答えた。

それにしても……この女は、果たして人間だろうか？

何処か、この教会と似た雰囲気を感じさせる。

俺が彼女に教会の人間かと尋ねたのも、そういったところが関係しているのかもしれない。

「……他に、何か？　あまり見つめられると、良い気分はしないのですが」

女は怪訝そうな表情をする。

その表情ですらも美しいのだが……どうしてか、俺には受け入れがたいものがあつた。

「そうか。それは悪かった。気に障ったのなら謝る。済まなかった」

取り敢えず、そう謝っておく。

背中に走る悪寒を、どうにか抑えながら。

しかし、女は何も言わない。

ただ俺を、疑惑の眼差しで見つめるだけだ。

その空色の瞳が、俺には眩し過ぎた。

何物にも染まらない青空と俺の間には、相容れないものがある。

「もう一つ聞きたい事が有るんだが、良いか？」

もう、耐え切れなかった。

「

お前は、何だ？」

## 第2章 そして運命は始まった

「何だ……って。アンタ、自分がどんなに失礼な事言ってるか解ってるの？」

まさか、モノ扱いされるとは……。

この男、常識だとか、良心だとか、そういった社会生活に必要なものが悉く欠如しているのでないか。

でなければ、こんなに失礼な事は言えない筈だ。

「アンタ、話聞いているの？」

口調を、気取らない自分本来のものに戻して、私は遠く、私の後方を睨む男に詰め寄った。

「聞いているのかって言ってるのよ！ このクソ野郎！」

ああ……クロリス、父様、ごめんなさい。

私、はしたない言葉を、教会で使ってしまった。

でも、私にも言い訳させてください。

確かに、こんな言葉を使った私に非はあります。

しかし……この男に非がないと言えるでしょうか？

この男、勢い余って胸倉を掴んだ私に、何をしたか知っています？

まさか、投げ飛ばされるとは思いませんでしたよ。

胸倉を掴んでいた私の手を握って、こう、クイツと。

まさか、あんな軽い動きであそこまでの高さに至るとは思いませんでした。

空中で二回転半もしてしまいました。

もし受け身を習っていなかったらと思うと……ゾッとします。

でも、それはもうどうでも良いんです。

背中を強かに打ちつけて、その痛みで男に対する怒りを更に燃やす私の目に飛び込んできたもの。

それは怒りを疑問に変えるのに容易な、不可解なものでした。

腰に差された刀を引き抜き、外に向かう男の姿……。

それは、私に痛みを忘れさせ、男の後を追う活力を生ませたのです。

女の啞然とした表情が視界に入る。

しかし、俺にとってはそれはどうでも良い事だった。

女の後ろ、何の前触れもなく現れた、動物を象った仮面を被った者。

男女の判別の出来ない中背に、曲がった腰。全身を覆う黒い革服。

そして、何より特徴的だったものは、その雰囲気だった。

この都市の、この教会の、あの女の、美しく清らかな空気とは隔絶された、故郷帝都のものと似た淀んだ空気。

そうか……あの女を見た時感じた嫌な感じは、これだったのか。

あの綺麗な空気に僅かに付いて回った、汚らしい空気。

その異様なコントラストが、余りに見るに耐えなくて、俺はあの女に対してあのような感情を抱いたのだろう。

「何だ……って。アンタ、自分がどんなに失礼な事言ってるか解ってるの？」

女が苛立ちを隠そうともせず言う。

しかし、その言葉は女ではなく、その後ろに付いた鳥の仮面を被った淀んだ空気の者に言ったのだ。

だというのに、この女は……。

俺は女を視界から外し、後ろで佇む鳥面に睨みを利かせる。

ここに入ってくるなど。

ここはお前が入って良い場所ではないと。

なんなら、俺も共に出ていくからと。

男に視線を送る。

「アンタ、話聞ってるの？」

女が詰め寄ってくる。

それに合わせて、鳥面も近付いてくる。

鳥面が教会に立ち入るまで、あと一歩。

「聞ってるのかって言うてるのよ！ このクソ野郎！」

女が胸倉を掴んで苛立ちを爆発させる。

その大声に触発されたように、鳥面が、動いた。

何処からかナイフを取り出し、教会へと踏み行ってくる。

その行動に、怒りか、それとも帝都時代の本能か、体が動いた。

進行方向に居る、邪魔な女を後方へ投げ飛ばす。

金の砂を思わせる長髪が宙を舞い、そのまま後方へ。

その勢いのまま、俺は男を教会の外へ蹴り飛ばした。

小さな呻きを後に残し、綺麗に整備された教会の庭園を転がっていく。

しかし、鳥面は何事もなかったかのように起き上がる。

どうも、ある程度の受け身など、そういったものは習得している

ようだ。

ナイフを構え、こちらに向かってくる。

俺はそれを迎撃する為、カグラを抜いて鳥面と激突した。

「それで？ どこに行く予定なんだい？」

僕の手を引いて先行するニーナに行先を尋ねた。

「そうですねー。先輩は何処に行きたいですかー？」

間延びした声を返し、ニーナはワクワクを抑えきれないといった表情をこちらに向け、ニツコリと笑った。

「僕は……別にどこでも良いけど」

その可愛い笑顔に心がポカポカと温かになっていくのを感じ、僕はニーナに笑顔を返す。



「あう……。その笑顔は反則ですよ、先輩」

何故か顔を真っ赤にして俯くと、ニーナは聞きとれない声量で何か呟いた。

「ん？ 何か言った？」

「……なんにも。先輩、どこでも良いなんて優柔不断な事を言っていると、デートの時に女の子を困らせますよ？」

何故か不貞腐れた様な表情をして、ニーナは僕の返答に文句を付ける。

「そうかなあ？」

「そうですよ。さ、行きましょう。一応決めてはいるんですよ」

ニーナは握ったままの手を更に強く握り込んで、僕の手を引いていく。

僕は、何か悪い事でも言ったかな？ なんて考えながら、その勢いに従った。

「先輩。今日って、中央教会で何かイベントなんてやってましたっけ？」

走ったり、疲れたら歩いたりして、数分。  
何時の間にやら中央教会前までやってきたようだった。

「イベント？」

「ほら、アレですよ。見えませんか？」

指差された方向を見ると、確かに、黒服の人々が何かやっていた。一人は長身で、もう片方の中背の方を蹴飛ばしたりしている。もう片方も銀色に光るナイフを振り回すが、長身の人を持つ刀に阻まれる。

どうやら、長身の男は手を抜いている様だ。あの腕前なら、中背の人なんて直ぐに倒せてしまうだろう。

「確かに、イベントみたいだね」

こんな街中……しかも、教会前で刃物を振り回しあう筈がない。

どうせ、旅行者用の演武だったりするのだろう。

……まあ、それにしあって、何故教会の前で、しかも誰も見物人が居ないのに、という疑問は残るのだが。

「……あれ？先輩のお姉さんも居ますよ？」

「え？ 姉さん？」

「そうです。 あんな美人、 遠くからだって見間違っ箆有りません」

探すと…… 確かに居た。

教会の扉前で、 演武を行う二人を眺めている。

「お姉さんもイベントに参加しているんですか？」

「いや、 聞いてないけど」

「そうなんですか？ でも…… お姉さんの後ろに、 あの黒い人も  
う一人いますよ？」

「うん。 でもあの人って、 出番待ちの人じゃないの？ 何か、 参加  
してないみたいだし」

「でも…… お姉さんに近付いて行ってますよ？」

目を凝らして見ると、 黒い人は徐々にだが姉さんに近付いて行っ  
てる。

その手に、 ナイフを持って。

…… いや、 大丈夫だろう。

こんな所で、 そんな。

しかも、 姉さんが。

そんな事、 有り得る事じゃない。  
有って良い話じゃない。

姉さん、気付いてくれ。

いや、そういう演技なんだろう？

それか、誰かが助けに入るとか。

そういう脚本なんだろう？

だったら、早く、早く。

黒い人が、ナイフを振りかぶった。

……ああ、もう。

もしイベントだったら、責任者に頭を下げよう。  
費用を弁償しても良い。

だから、ここは僕の思うままに、動かさせてくれ。

「  
姉さん!!」

叫んで、僕は姉さんの元へ駆けて行った。

その剣技は、ひたすら流麗。体捌きはただただ美麗。

男の動きは、今まで見たどんな士よりも素晴らしいものだった。

鳥面の男のナイフを刀で受け止め、その腹を蹴り飛ばす。

懲りずに向かってきたナイフを持った腕をひねる。

とにかく、圧倒的だった。

「……やるじゃん。アイツ」

ちよつと見直した。

相手を殺さない様に手加減しているのか、少し動きはぎこちなかったが、それでも素晴らしいものがある。

……ま、それでも、アイツのした事を許すわけではないんだけどね。

「姉さん!!」

男の動きを見つめていると、聞き覚えのある声が聞き覚えのある呼び方で私を呼んだ。

「……クロリス？」

その声のした方向を見て、私は、背後に迫る人影に気が付いた。そいつは、青空に映えるナイフを振りかぶっている。

「な　　!？」

一直線に振り下ろされたナイフを止め術は、私にはない。

ただ死を待つだけだ。

「姉さん！」

遠くで、弟が私を呼ぶ声がする。

でも……多分、クロリスは間に合わない。  
私にも、どうする事は出来ない。

ごめんね。クロリス、聖剣祭での貴方の雄姿、見れなくなっちゃた。

楽しみにしてたんだけど……ごめんね。

ああ、父様。

今だから言います。

私、結婚なんてしたくありませんでした。  
まだ、家族の皆と過ごしていたかったです。

走馬灯のように、今まで会ってきた人々の顔が思い返される。

その中に、あのム力つく男が出てきた時、私は思った。

呪ってやるかぁ。アイツの事。

そう思うと、少し笑えた。

……瞼の上に、死の影が、近付いてきた。

## 2 - 1 この世で一番最低な男

そう、私が自分の死を確信した時。

「……へ？」

間抜けにもそんな声を漏らしながら、私は……空へと、舞い上がった。

どんどん上へ。今まで自分が居たところを見やると、あの癪に障る男が、ナイフを持った狸面を蹴り飛ばしていた。

恐らく、というよりきっと、アイツが私を救ってくれたのだろう。

死の淵より救われるという、恋心を抱いてもおかしくない状況なのだが、どうして、アイツに対しては怒りしか浮かんでこないのだろう。

全く、人の心というのは不思議だ。

「姉さん！」

上昇も終わり、そろそろ自由落下に入るといった頃、私は、安心と不安を入り混じらせたクロリスの声を聞いた。

想像以上の速さで予想落下地点まで辿り着いたクロリスは、私を受け止めようとしているのか、大きく手を広げる。

鳥面は当然現れたクロリスに、一瞬ぎこちない動きを見せるも、瞬時にそれを抑え、今現在最も厄介であろうあの癪に障る男の元へ

向かっていった。

「姉さん、大丈夫？」

衝撃を全て自分に回したのか、顔を痛みに歪ませながらも、クロリスは優しい笑顔でそう私を気遣った。

「ええ。あなたは？」

しかし、クロリスにその気遣いを指摘しても、決して認めようとしないので、私は敢えて礼を言わず、クロリスの頭を撫でる。

「大丈夫。気にする程のものじゃないよ。それより、姉さん。一体何が」

「せーんぱーい！置いてくなんて酷いですよー！？」

クロリスの声を遮って、甘ったるい声を響かせながら、小柄な女の子がこちらに走ってやってきた。

「こんな可愛い女の子置いて行ったら置き引きされちゃいますよ……って、お姉さん。お久しぶりです。イベントのキャストに選ばれるなんて、やっぱりお姉さんは凄いですね！」

コロコロと表情を変えていきながら、小柄な女の子は私の手を握り、そのままブンブンと振り回す。

「さっすが先輩のお姉さんって感じです！都市を挙げてファンクラブが出来るのも肯けますよ！」



「に、ニーナさん、ですよ？ そろそろ止めて貰えると、ありがたいのですけれど」

あの男の所為で剥がれてしまった猫を再び被り、私はニーナさんに手を離すよう要望する。

「す、すみません。私、つい興奮しちゃって」

ニーナさんはそう言つと、心底申し訳なさそうに何度も頭を下げる。

前に会ったときは気づかなかったが、どうやら、感情表現がとても豊かな子らしい。

「いえ、気にしないで。もう平気だから。それより、イベントって？」

「え？ あ、あの、アレって何かのイベントじゃないんですか？」

指差された方向を見ると、そこには、仮面を被った二人の人物と互角以上の戦闘を繰り広げる、あの腹立たしい男の姿が。

しかしその姿は、男の人間性を補ってあまり有る程、素晴らしいものだった。

二対一という不利な状況であるにも関わらず、一步も退かず、逆に圧すほどの腕前に、相手を近付かせない体捌き。

そのどれをとっても、一級品だった。

「ほら、今日って、列車の来る日ですし、何かのイベントなのかな……って、お姉さん？」

「……え？ な、何かしら？」

ゆさゆさと漸く私は、ニーナさんに話しかけられている事に気が付いた。

「どうしたんです？ まるで恋する乙女のような瞳で まさか、あの中に好きな人が居るんですか！？ そうなんですね！？」

ニーナさんは急に目を爛々と輝かせると、饒舌に語り始める・

「でも、今までそんな浮いた噂のなかったお姉さんが……いや、分かりました。つまり、こういう事ですね？ あそこの三人はこの都市の人間ではなく、他都市の旅芸人。急に出会った今までにないタイプの男に、お姉さんは他の人とは感じた事のない雰囲気を感じ、恋心を抱く。しかし、お姉さんは聖都を代表する貴族の子女。その恋はただ眺める事しかできない哀しいものだった……って感じですね！？ 大体合ってますよね！？」

「いえ、全然違」

「ええい皆まで言うなあ！ 分かってます。分かってますって。あの長身の男の人でしょう？ 目付は悪いですが、確かに男前です。それに、強いときた。お姉さんの気持ちとは分かります」

「だから、違います」

大体、あの男に惚れる等、絶対にあり得ない。絶対にだ。そもそも、人間の精神構造上恋愛感情を抱くのは仕方がないとして、あの、この世の罵詈雑言を使い果たしてもまだ足りない程の男に、愛情を持つのはおかしいのだ。

「本当ですか　って、終わっちゃいましたけど、お姉さんは出なくても大丈夫だったんですか？」

見れば、仮面の二人は撤退を開始しており、もうその姿が小さくなる程までに、遠ざかっていた。

「あれ？　あの背の高い人、こっちに来ますよ？」

「え？」

確かに、男はゆっくりとこちらに近付いてきていた。

「お姉さん、どうします？　告白かもしれませんよ？」

そんな訳がない。

あの男の性格上、そしてあの男の表情からして、そんな事があるわけがなかった。

悪い目付を更に歪ませ、肩を揺らしながらこちらに歩いてくるその姿は、不機嫌を隠そうともしていなかった。

「おい、女」

私のすぐ目の前で立ち止まった男は、その夜を思わせる黒い瞳で真っ直ぐに私の目を見つめる。

「……女？」

男の随分な物言いに、私は男以上の不機嫌を言葉に込める。

人を性別で呼ぶだなんて、失礼にも程があるんじゃないだろうか。

「私には、アレクシアって名前があるんだけど」

「それがどうした。お前の事など訊いていない」

後ろで、ニーナさんが、うわ、と呟くのが聞こえる。  
確かに、そう言われても仕方がない声色だった。

「……それじゃ、何よ？ 私に何の用？」

男の鋭い眼差しを睨み返し、私はそう問う。

男は無言のまま、その場に佇み、そして

急に、拳を振り上げた。

## 2 - 2 素晴らしきこの世界

他人を殴る事に、躊躇いなどない。

自分を通す為、生きる為、力を振るわなければならない状況に今まで居た俺は、その事に疑問を持たなかった。

教会に、あんな穢れを運んできたあの女が許せない。  
自分の目標としていた場所を汚したあの女が許せない。

だから、殴る。

……だが、本当に、それで良いのか？

振り上げられた拳を見て、啞然とする三人を見る。

一人は、アレクシアと名乗った美しい女。もう一人は、瞳を潤わせた小柄な女。最後の一人は、どこかアレクシアに似た、中性的な容姿をした性別不明の人物。

三人が一樣に、俺を見て、目を見開いていた。

その眼差しに、帝都での出来事が脳裏によぎる。

助けを求める手を振り払い、死体の山を踏み歩き、気に入らない者を薙ぎ払ってきた、あの頃を。

今までの自分を捨てようとしていた筈なのに、また俺は、あの瞳と正対しなければならぬのか？

そんな事で良いと、本当に思えるのか？

「……………え？」

過去を思い返し、拳を下げると、アレクシアが意外そうな声を漏らした。

「何だ？ 殴って欲しかったのか？」

殴ろうとした時以上に茫然とした顔でこちらを見つめるアレクシアに、そんな嫌味を言う。

「な  
」

顔を赤くして、何か言おうとするアレクシアに背を向けて、俺はその場を後にした。

「……………何だっ たんですか？ あの人」

ニーナが、僕の疑問も代弁するように、男の背中を見ながらそう

言った。

「無茶苦茶な人だったね」

拳を振り上げた時の、男の表情を思い返す。

……あの人は、確実に、姉さんを殴ろうとしていた。

それこそ、何のためらいもなく、至極当然のように、良心の呵責なしに、だ。

だというのに、あの人は、急に拳を収めた。  
突然、迷いが見えた。

あの瞳の揺れは、何かに戸惑っているようだった。

「無茶苦茶、ね。そんな言葉じゃ足りないわ」

吐き捨てるように、姉さんが言った。

普段、想いを押し殺し、表には出さないよう努めていた姉さんには考えられない程、感情の籠った声だった。

「そうです！ お姉さん、悪い男に引つかからなくて、良かったです  
ね！」

何か勘違いしている様子のニーナは、明るい声で姉さんを励ましていた。

どうも、姉さんがあの人に好意を持っていると、そんな想像をしているようだった。

確かに、あの人に対する姉さんの態度や、眼差しは、普段とは考えられない程想いのあるものだった。

昔から施されていた教育の賜物か、どんな失礼な態度をとられても、超然とした雰囲気崩さなかった姉さんが、ほぼ初めてと言っても良い位に、人間臭い行動を取ったのだ。

勘違いしても仕方はない。

しかし、長年家族として一緒に暮らしてきた僕には分かる。

姉さんがあの人に向ける感情は、恋ではなく、限りなく憎しみに近い憤怒だろうと。

恋心というには、あの感情はドロドロし過ぎている。かといって、嫌悪と言うには激し過ぎる。

姉さんは、怒っているのだ。

あの人の、何かに。

僕には、それが何なのか分からなかったが、そうとしか考えられなかった。

姉さんの表情を覗く。

今はもう見えなくなった男の去って行った方向を見る姉さんの表情は、歪んでいる。

「……帰るわよ、クロリス」

少しして、普段ならあり得ない、乱暴な口調で姉さんが帰宅を促



す。

「それより、姉さん。何があったか、訊かせてもらえる？」

今までの人の強烈な印象で忘れていたが、一体、あの仮面の人間たちはなんだったのだろう。

ニーナの言う通り、イベントなら良いのだが……僕には、そうとは思えなかった。

姉さんに向けられたあのナイフは、確実に姉さんを殺す気だった。

「ニーナの事なら心配いらないよ。いつもはこういう娘だけど、口は堅いから」

ニーナの方を見て、逡巡している様子の姉さんに、僕はそう声を掛ける。

確かに、ニーナの常はハイテンションで、明るい性格だけど、僕は知っている。

ニーナは、人の秘密を漏らさない、とても信頼の置ける人物だと。

「はいです！ 私、口は重いです。というより、生まれてこのかた喋った事ありません！」

任せてください！ とニーナはちいさな胸を張る。

「ま、まあ、少しニーナの頭を疑ってしまうような事言ってるけど、口が堅いのは本当の事だから。安心してくれて良いよ」

それに、と僕は続けて言う。

「それに、ニーナも、『五家』の内の一つ、カステラ家の一員なんだ。僕らの家に関する事なら、尚更言わない筈だよ」

### 五家。

昔から、聖都の中で重要な立ち位置を持つ家系。それぞれが行政に深い繋がりがあり、実質、この聖都を動かしているといっても過言ではない程の権力を持つ。

そして、僕らの『リヴァーモア家』も、ニーナの『カステラ家』も、この五家の一つである。

そして、五家は、自らの保身の為、自分たちの情報を漏らす事はなく、そして、五家のトップである、リヴァーモア家に逆らう事もない。

「……そう。それでは、話しても平気、なのかしら？　ねえ、ニーナさん」

姉さんが妖艶に笑う。

どうも、乱されていたペースが戻ってきた様だ。

「　はい！　任せてください！」

その狡猾な毒蛇のような、獰猛な獅子のような瞳に圧倒されたのか、ニーナは背筋をピンと伸ばし、姉さんに向かって敬礼した。

「ふふ、良い娘ね。クロリス、『遮断の響奏』を」

『遮断の響奏』。人の認識に効果を及ぼす『第四響奏術』の一つ

であり、他人の、視覚だったり、聴覚だったりといった、認識を遮断する、第四響奏術の中でも高位の術式なのだが、他人に漏らしてはならない情報のやり取りをする事の多い貴族の間では、基本を差し置いてでも教えられるものだ。

姉さんの言葉に頷いて、僕は言葉を紡ぐ。

「クロリス・リヴァーモア、ニーナ・カステラ、そして、アレクシア・リヴァーモアに関する、『全ての情報の遮断』を開始。繰り返し、クロリス・リヴァーモア、ニーナ・カステラ、そして、アレクシア・リヴァーモアに関する、『全ての情報の遮断』を開始」

術式の起動の際に紡ぐワードは、術者によって様々だ。

詩のように、美しいワードを紡ぐ者もいれば、語呂合わせのように、言いやすい言葉紡ぐ者もいる。

僕のように、事実だけを告げるワードの紡ぎ方は逆に珍しいらしい。

「……相変わらず、風情の欠片もないワードですね、先輩のは」

ニーナが、やれやれという風に肩を竦める。

「全くな。展開の早さは流石だけど、もう少し、風流と言うものを学んだ方が良くはないかしら？」

姉さんとニーナは、どうも昔から僕のワードの紡ぎ方が気に入らないらしい。

やりやすいんだけどなあ。このやり方。

「ま、まあまあ、発動出来た事だし、そこはひとまず置いておいて、

姉さん、話してくれるね？」

このままでは二人から説教が始まりそうだったので、僕は話を本題に進める。

「そうね。術式の効果も、いつまで持つか分からない事ですし」

そう言って、姉さんは事の顛末を語り始めた。

帝都では考えられなかった、綺麗に舗装された並木道を進む。  
煉瓦造りの石畳に、陽光を柔らかに受け止め、風に揺れる木々達。  
道を往く人々ですらも、温かな空気を纏っており、まるで、一つの  
楽園のようであった。

その、淀み過ぎていた帝都とも、綺麗過ぎた教会やあの女とも違  
う空気は、居心地が良く、聖都に来て良かったと、そう思わせる空  
気だった。

「おや？ おやおやおや？」

そんな中、何処かで見た事のある服を着た一人の男が、俺を見るなり、顔を喜色満面にしながら近付いてきた。

真っ白に染まった髪を全て後ろにやり、大きな眼の中に輝くブラウンの瞳はモノクルを通して俺を見つめる。

その容貌から、年齢は不詳。見ようによつては二十代にも五十代にも見える。

ただ、飄々とした雰囲気でも隠しきれない、得体の知れない『何か』があつた。

「うん。なるほど。なるほどなるほどね」

俺の体を舐めるように、あらゆる方向から見回し、時には撫で、年齢不詳の男は、一言、こう言った。

「君、良い男だね」

「……は？」

何を言っているの分からず、俺は男に訊き返す。

「いや、良いね。良いね、君。是非脱いで見せてくれないか？」

「……な、何を？」

「裸」

な、何なんだ、コイツ。

帝都では居なかったタイプの男だ。聖都では普通の事なのか？  
そもそも、他人の裸を見て何になる。何の意味もないだろう。

「さあ、脱いでみ　グボアッ！」

「何やってんだクソ神父」

なんだか危険な感じのする男は、突如横から飛んできた誰かにドロップキックをかまされ、横に吹き飛んで行った。

「まったく、好みの男を見つけると直ぐコレだ。悪いな、少年。ケツの方は平気か？」

横から飛んできた人物は、先程の教会で見たシスターと同じ服に身を包んだ、妙齡の女だった。

ブラウンの瞳を持つ垂れた眼に、シャープな顎、年齢不詳な容貌は、先程の男にそっくりだった。

「平気だ。あの男は、アンタの兄弟か何かか？」

植え込みに頭から突っ込み、未だ起き上がってくる気配を見せない男を指差す。

「ああ、ウチの愚兄だ。全く、その気の無いヤツには手を出すなど何度も言ってるんだが……おい、いい加減に起きろ！」

そう言うと、シスターは植え込みの男を引っ張り出し、その腹に蹴りを入れる。

「うつ……ひ、酷いな、モモちゃんは。いきなりのドロップキックは先週の家族会議で禁止した筈じゃないか」

腹を押さえて立ち上がると、男は悲痛そうな声を漏らす。

「黙れ。まずテメエが誰彼構わず手を出そうとしなけりや良いだけの話だ」

「そんな！ 良い男を見掛けて声を掛けないのは紳士の心得に反するよ！」

「安心しろ。少なくともテメエが紳士であつた事は未だかつて有り得ねえから」

「僕ほどの紳士はこの地球上に居ないよ！ 女の子に手を出した事は一度もないんだよ！？」

「そりゃテメエの性癖の問題だろ！ 女に興味ねえだけだろうが！」

「当たり前だ！！」

「開き直るな！！」

どんなに罵声を浴びせられても挫けない男は、その喧噪の合間に俺に何度もウイंकを送ってくる。それがまた、何とも背筋を震わせた。

「まあ、待つんだ、モモちゃん。見ろ、周りの人が皆引いていく。ここは、停戦協定というのではないか」

何故だか、極めて冷静に、神父らしい男は手でモモと呼ばれた女を遮った。

「引いてるのは全部テメエの所為だ！」

全くだ、と俺は思う。

この男さえいなければ、この場はこんなにも混沌としてはいなかっただろう。

神父とシスターが言い争う渦中に、異邦人が居て、それを他の人間が遠巻きに眺めている。

明らかに、異常な光景だった。こんなの、帝都でも有り得ない。

「さて、それで、君の名前を覚えてもらおう。ちなみ、私はジジ・バドエルだ。こちらは、モモ・バドエル。世界でたった二人だけの家族だ」

「アタシはもっとマトモな家族が欲しかったけどねえ！」

叫ぶモモ。

その気持ちは推して測るべし、だろう。言葉の意味は分からないが。



「……ハルキ・テン力だ」

このまま名乗らないでいたら、面倒なことになるだろう。  
そう思い、俺は名を告げた。

「…………ハルキ？」

その途端、ジジが一瞬、怪訝そうな表情を見せる。

今までの飄々とした雰囲気が一気に消え去り、真剣な表情を覗かせる。

「……アニキ？」

モモが心配そうにジジの顔を覗き込む。

しかし、それでも、ジジは似合わない真面目な表情を崩さない。

「……………良い」

「は？」

「良い男とは名前すらも良いものなのか。全く、勃起するところだった」

「死ね、クソ神父！！」

モモのとてつもない蹴りが首に入り、ジジはまたしても植え込みに突っ込んだ。

「……つまり、教会で初めて出会った男に二度も投げ飛ばされ、拳  
句に仮面の奴らに命まで狙われたって事ですね？」

「解り易く言えば、そうね」

ニーナの要約に、姉さんは頷く。

「……散々でしたね」

「そうね、散々、よ」

苦々しく、姉さんは言い放つ。

その口調には、やはり、演技でない生々しい感情が含まれていた。

「でも、あの人って、本当に悪い人だったのかな？」

「……何言ってるの？」

姉さんが、人前ではしてはいけない表情でこちらを睨む。

背の低いニーナは見えないから良かったものの、もし見てたら、

気絶や失禁は禁じえないだろう。

「そうですね！ 先輩、おかしくなっちゃたんですか!？」

「いや、僕も、あの人の全てを悪くないって言う訳じゃない。でも、さ。こんな風には考えられない？ あの人は、暗殺者から姉さんを助けてくれたって」

僕達貴族に、暗殺の危険にさらされる事がないとは、言い切れない。

例えば、他都市に赴いた時など、いろいろな場面で、暗殺の危険というのは訪れるものなのだ。

それが、自分の都市で起こったとしても、何ら不思議ではない。そもそも、今まで暗殺の危険に出くわさなかったのが幸運なのだ。

「そ、それは、考えられない話ではありませんけど」

ニーナが言い淀む。

今までの悪人が、突然、救世主に変わろうとしているのだ。それは仕方のない話だ。

「姉さんは、どう思う？」

「関係ないわ。例え命を救われたとしても、私とアイツは相容れない。ただそれだけの話よ」

「……姉さん」

滅多に見せない頑固な態度を取る姉さんを、僕は少し微笑ましく思ってしまう。

それが確実に憎悪よるものにしろ、こういう態度を取る姉さんは、良いと思う。

「……何よ？」

笑っていたのがバレたのか、少し不機嫌そうな声色で姉さんが問う。

「いや、なんでもないよ」

誤魔化して、僕は遮断の響奏を解く。

「もうこの話はお終いにしよう。誰かを憎んでも、何の得にもならないよ。それより、姉さん、何処かに遊びに行かない？　これから二ーナと、遊びに行く予定だったんだけど」

しかし、たとえ僕にとっては微笑ましいものでも、あの人にとってはそうではないだろう。

そう思い、僕は姉さんの感情を他のものに向けさせる事にした。

しかし……

「いいえ。私は良いわ。あなた達二人で行ってきなさい」

二ーナの方を見ながら、姉さんは僕の誘いを断った。

「……そう。残念だな。でも、大丈夫？　アイツらがまた襲ってくる

るかもしれないけど」

「平気よ。警官を捕まえて、送ってもらってから」

そう言つと、姉さんはニーナの耳元で何か囁いて、真っ直ぐと警官の詰め所に向かつて行つた。

「姉さん！……って、行っちゃった。大丈夫かなあ」

言つて、ニーナの方を向く。

「……何やってるの？」

しきりにガッツポーズをしているニーナに、僕はそう訊く。

「い、いえ！ 何にも！」

「そう？ なら良いんだけど。……そう言えば、さっき姉さんに何て言われたの？」

「えー？ あ、あの！」

「ほら、何か耳元で囁かれてたじゃないか。あれ、何だったのかなあって」

少し混乱して様子のニーナに、僕は話の要旨を伝える。

「そ、それは……」

「それは？」

「が、頑張っ  
てね、って……」

「何を？」

「せ、先輩は知らなくても良いんですよ……！」

少し怒ったように言って、ニーナは僕の手を引く。

「ほら、行きますよ、先輩！」

またしてもニーナに手を引かれて、僕はその場を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0858m/>

---

鎖空

2010年10月10日02時42分発行